説教20201122テモテ二3:10-17 　讃美歌　21-551 2-41 338

「救いに至る知恵」

キリストよお越しください。弟子たちの中に立ち、復活の御姿を現されたように、私たちのうちにもおのぞみ下さい。

　私たちは多かれ少なかれ「真理に逆らって」、日々の生活を歩んでいます。そのような私たちに対して、主イエスは「救いに至る知恵」を教えてくださいます。先週私たちは厳しい話を聞かされましたが、今日の聖書箇所における話は間違いなく恵みの言葉であります。私たちはみんな、意識的であれ無意識的であれ、日々、救われたいと願いながら生きているものです。１５節には「この書物は、キリスト・イエスへの信仰を通して救いに導く知恵を、あなたに与えることができます」と記されており、聖書には救いに導く知恵が記されているようです。しかし、では、その知恵とは何ですか、私たちはどうすればよいのでしょう、といった身につまされた具体的な問いかけに、答えが与えられることが大切です。そのためには聖書の解き明かしが必要です。聖書の語ることに耳を傾けてまいりましょう。

　まず、ここで使われています知恵という言葉に注目しましょう。知恵という語の元のギリシャ語は、ソフィアという語で、このソフィアはカタカナ語としても用いられています。では、ソフィアって何ですか、と問われると、はてさて何だろうと皆さん首をかしげるのではないでしょうか。ソフィアというのは、大変広い意味合いを持っています。その意味を列挙していきますと、知恵、知識、賢さ、科学的な知恵、哲学的な知恵、あるいは情報などといった意味合いも含まれます。すなわちソフィアというのは日本語一文字で訳するならば知識の「知」ということになりましょう。「救いに至る知恵」「救いに至るソフィア」にはこのように幅広い側面があるのですが、このままですとなんだかぼんやりして焦点が定まらないですので、今日は２，３のポイントに絞って解き明かしてまいりたいと願います。

　まず、今日の世の中に生きています私たちが思い描く「知恵」とは何でしょうか。一例をあげますと、次のように思っている方もおられるでしょう。「私たちは、知恵を多くの場面で学び知ることが出来る。それは家庭や友人関係や学校での学びなどを通して、もたらされる。そして知恵は私たちの人生を豊かにし、安全で実りあるものにするだろう。」このように普通に考えられると思います。これは今、私たちが「知恵」に対して抱かされています、一つの先入観を物語っています。それはどんな先入観かといいますと、知恵というものが、まったく手放しで私たち人間にとって良いものであって、私たちを利するものだという、いわば知恵礼賛の態度です。しかし知恵を礼賛し賛美するということは、或る意味大変危険なことであります。なんでもかんでも知ってしまえば、よいというわけではありません。私たちは本来、多くの知らなければよかった、という事柄に取り巻かれながら日々、生かされているのではないでしょうか。又、知恵が危険な働きをなすことも間々あります。例えば、今の北朝鮮の国家が、核に対するより深い知識を得たとしたら、日本に住む私たちの危険は、より深まってしまうことでしょう。

　このような知恵のもつ危険な側面は、悪知恵などと古来言いあらわされてまいりましたが、なぜか今日の私たちは、知恵のそのような危険な側面から目を背けるように慣らされていると思います。そのことを言葉を変えて言いますと、今日の私たちは、知恵をすべて管理しコントロールしたがっているともいえるでしょう。

　ですから、今日の招きの言葉で語られました、コヘレトの言葉、「賢すぎるな／どうして滅びてよかろう。」を聞きますと、なんか腑に落ちない、あるいは反発を覚える方もおられることと思います。賢すぎて困ることがあるのだろうかと。

　私たちはここで一旦、知恵礼賛がもたらすこのような先入観を脱ぎ捨てたいと思います。そして、聖書が語る知恵に耳を傾けてまいりましょう。

　聖書には、驚くべき、そして恐るべき主なる神の知恵の数々が記されています。この山と海と、そして生き物すべてを作られた、恐るべき神の知恵。知恵というものは、もともと、私たちが管理しコントロールできるものではないのです。詩編139の14節は語ります。「わたしはあなたに感謝をささげる。わたしは恐ろしい力によって／驚くべきものに造り上げられている。御業がどんなに驚くべきものか／わたしの魂はよく知っている。」ここで一人の人間である私は、神に感謝を捧げつつ、自分自身も、神の恐るべき、驚くべき知恵によって作られた者であることを告白し、その知識も神から与えられたこととして、神に感謝を捧げています。

　このような知恵に対する見方は聖書に一貫してみられることですが、それを神の知恵と言い表してもよいでしょう。

神の知恵は、今の世で先入観として与えられています人間の知恵のあり方とは大いに異なるものです。パウロも神の知恵と人間の知恵の違いに留意して、コリントの信徒への手紙一１：２０、新約聖書３００ページで「知恵のある人はどこにいる。学者はどこにいる。この世の論客はどこにいる。神は世の知恵を愚かなものにされたではないか。」と語っています。

　私たちが、今管理しコントロールできたと思っている、知恵の数々は、本当は神から出たものであります。それは決して私たちがコントロールできるようなことではなくて、驚きと恐ろしさに満ちたものなのです。しかし、主なる神は、その知恵を恵みとして、時に適って、私たち人間に、分け与えてくださるのです。

何か、私たちは知恵というものが、一人一人の持つ能力によって獲得されるものだと信じているのではないでしょうか。平たく言えば、頭のいいひとは、より多くの深い知恵を獲得でき、頭の悪い人は、少ない知恵しか得られない、と思い込んでいるのではないでしょうか。しかし、聖書が語る知恵は、私たち人間の能力によって獲得されるものでは決してありません。それは、私たち人間一人一人の必要に応じて、主なる神が、私たちに恵んでくださるものです。知恵という驚くべき主なる神からの賜物は、私たち人間が飼いならして管理できるようなものではなく、それを管理し始めるところには、様々な惑わしやひずみがあらわになってくると思います。

　では、その恐るべき、驚くべき、私たち人間には図りしれない知恵の一端を、語ってまいりましょう。今日はミステリーとしての知恵の側面を語りたいと思います。「救いに至る知恵」は、ミステリーであります。ミステリーとは、秘密、秘訣、秘儀といった意味です。つまり、主なる神が、私たち人間に、内緒でこっそりと教えてくださる知恵であるといってもよいでしょう。しかし、ここで反論があるかもしれません。主イエスは、「出て行って、すべての民に教えなさい」と私たちに命じられたのだから、これは秘密でもなんでもないのではないかと。しかし、私たちがすべての人たちに、こっそりとイエス様のことを告げ知らせていることは事実だと思います。この救いに至る知恵は、古来、こっそりと伝えられてきました。しかし、それは絶えることなく連綿と続けられているのです。「こっそりと」という言葉に一抹の語弊があるとすれば、「時と所をわきまえて」伝えられると言い換えてもよいかと思います。

なぜ、こっそりと告げ知ら去れるのかといいますと、それは、救いに至る知恵が、悪人や詐欺師の手に渡ることを避けるためです。今日の聖書箇所の１２節に「悪人や詐欺師は、惑わし惑わされながら、ますます悪くなっていきます。」とありますが、驚くべき、恐るべき知恵は、悪人の手に渡って悪用されるとき、その悪の力はいや増してしまうからです。

　例えば、エステル記に記されておりますが、ユダヤ人であるエステル妃やモルデカイたちは、宿敵であるハマンに対しては決して、救いに至る知恵を教えようとはしませんでした。それどころか、主なる神の存在さへ秘密にして、自分たちだけのものにしようとしていたようです。それくらいエステル妃たちは、神の知恵の驚くべき、計り知れない威力を知っており、それに恐れ入っていたのです。

　ただここで誤解しないでいただきたいのですが、今や新約の時代ですので、私たちは悪と思える人たちに対してもキリストの救いの福音を決して秘密にしてはいけません。そのために主イエスは私たちに「出て行って、すべての民に教えなさい」と勧告されておられるのです。私たちは、時に応じて、悪を避けるときもありましょうが、それでも「時と所をわきまえて」、キリストの救いの福音を告げ知らせることを続けていかねばなりません。

　さて洗礼と聖餐というサクラメントがありますが、このサクラメントという儀式も秘儀であります。サクラメントはギリシャ語でミステリオンといいます。つまり洗礼、聖餐という儀式も又ミステリーなのです。サクラメントは救いに至る知恵の一つですが、これは誰もが参加することではありません。そして洗礼聖餐への、唯一の参加要件は、あなたが、キリスト・イエスを信じているという事です。

　では、このミステリーとしての救いに至る知恵がどのように伝えられていくのか。その要点が１４節から１５節にかけて記されています。「だがあなたは、自分が学んで確信したことから離れてはなりません。あなたは、それをだれから学んだかを知っており、また、自分が幼い日から聖書に親しんできたことをも知っているからです。」ここで離れてはなりませんと訳されています語句は、ギリシャ語では「とどまりなさい」と記されています。「テモテよ、あなたは、自分が学んで確信したことにとどまりなさい」となります。あなたとは、パウロが実の子供のように思っていたテモテのことです。そして「学んだ」という語句は、習い覚える、親しみ身に着けていくという意味合いです。このようにテモテは幼い日から、聖書という書物をよりどころにしながら、その解き明かしを、親しい人たちから習い覚えてきたという事です。それはある意味、人間が身をもって教えることであり、ですから、それを誰から学んだかという事を知っている事は有意義だと言えます。よく飛び出す絵本というのがありますけれども、この聖書という、一生かけて学ぶとしたら、一見少ないなあと思えるこの書物の中には、今まさにここに飛び出してくる、救いに至る知恵が無限に込められています。そしてその飛び出すものとは、私たちの誰かの存在そのもの、その体と心そのものであります。そして私たちが立ち返るべきこの聖書は、私たちが救いに至る知恵を知ることが出来るその源なのです。

天に居ます私たちの父なる神様、今日はこの兄弟姉妹を御前に集めてくださり、あなたを共に礼拝賛美できますことに感謝いたします。

私たちは、今、あなたから多くの知恵を頂きながら、その知恵を、あなたの御心に沿って用いることが出来ないでいます。どうか、私たちが、あなたの御前にへりくだり、あなたからの知恵を、私たちを救いへと導くその知恵を、となりびとに告げ知らせていくことが出来ますように。

私たちの知恵が、互いに惑わし惑わされるために用いられることのないよう、私たちを悪よりお救い下さい。私たちを祝福し、信心深く生きようとする私たちが受ける迫害や苦難から私たちを守ってください。

今の世に在って、病気に苦しんでいる方、生活の困難に直面されている方、孤独を感じている方、望みを見失いつつある方々を顧み、彼ら彼女らに必要な慰めと癒し、励ましをお与えください。

今、ここにおられずユーチューブで視聴されている方々の上にも、あなたからの光があまねく届けられ、あなたの救いが示され続けられますように。

父と聖霊と共に一体であって代々に生き支配されておられます私たちの救い主イエスキリストのみ名によって祈り願います。